

# あしたばん

『あしたばん』とは、「三宅島大学」の広報誌として、慶應義塾大学加藤文俊研究室が継続的に発行しているかわらばんである。『あしたばん』という名前は、三宅村の「あした」について語るかわらばんを指すメディアとしての意図に、三宅村の特産品である明日葉（アシタバ）をなぞらえて名付けられた。

これは、同研究室が初めて三宅村を訪れた二〇一一年六月から発行しており、二〇一二年十一月二十二日現在までに号外含め四十号近く発行されている。記事の内容は私達の三宅村での活動から、三宅島大学の講座紹介、三宅村で出会った村民や出来事のことまで、実に様々だ。執筆者は基本的には同研究室のメンバーであるが、三宅島大学の講師陣やアーティストの方々が記事を執筆するなど、多様な方が『あしたばん』制作に携わっている。

出来上がった『あしたばん』は、発行後すぐに村内各地に届けられる。例えば三宅島観光協会や商店、民宿等（詳細は裏面）がその設置場所である。それらは一軒一軒設置をお願いし、今ではその数が二十五箇所以上となった。単に配布するのではなく、私

達が直接足を運び、手渡しすることで配布先の方の反応を直に見ることも出来る。その中で、「こんなこと書いてほしい」とフィードバックを頂くこともある。村民の方と『あしたばん』を手に取りながら話すことによって、単なる情報伝達のためのメディアではなく、コミュニケーションを誘発するメディアにもなっていくのだ。また、『あしたばん』を渡すことを通じて私達と村民の間のコミュニケーションを生むことだけではなく、手にとった村民同士の話のタネになることもあるだろう。

発行当初は村内での認知も限られたものであったが、手渡しなどの地道な活動や、設置に協力していただいている村民の方々によって、徐々に認知度も高まってきている。続けていくことの難しさを感じることもあるが、村内で『あしたばん』の話を耳にすると、もっと継続して発行していきたいという思いが自然と生まれてくる。

そして、設置協力などに協力してくれた方々へも感謝をせずにはいられない。制作中だけではなく発行後にも、本当にたくさんの方が『あしたばん』に関わっ

てくれている。このようなことから、『あしたばん』は私達「よそもの」と村民の方々が共同で作り上げた成果物であるとも言えるだろう。

『あしたばん』がメディアである以上、伝える側と受け取る側がいる。三宅村に住んでいるわけではない、外からきた私たちが発行するものに対する意見は、もしかしたら好意的なものばかりではないかもしれない。しかしながら、私たちよそものだからこそ感じられること、知らないからこそ新鮮な感覚で記事にできることもあるだろうと考え、素直な気持ちを記事にしてみた。

私たちが三宅村について語るといことは、確かに繊細な問題を含んでいるかもしれないが、だからこそ自分たちが見た三宅村を伝えることで村民の方々とコミュニケーションをとってゆきたいと考えている。

『あしたばん』を読んでくれる方がいる限り、これからも私たちと村民をつなぐ懸け橋である『あしたばん』の発行を続けていきたい。

(文責:長富将成 吉田あんな)

慶應義塾大学 環境情報学部 加藤文俊研究室

<http://ashitaban.net/>

【坪田地区】  
アカコッコ館  
木村電器商会  
築穴商店  
二幸商店  
新鼻荘  
三宅島空港

【伊豆・神着地区】  
岡太楼本舗  
スナッパー  
正大ストア  
清漁水産  
ペンション・オレンジ  
ハウス・パロン  
三宅島酒造販売  
山下商店  
利八屋

【阿古地区】  
北川商店  
共栄荘  
シタヤマ  
ふるさとの里  
ホテル海楽  
前田商店  
691(沖倉商店)

